

---

## 序 ～品井沼干拓と元禄潜穴工事への流れ

### (品井沼とは)

品井沼は、宮城・黒川・志田の三郡にまたがり、東西5.6キロメートル、南北3キロメートル、周囲16.5キロメートル、面積約18平方キロメートル、平水時の深さが1.5メートル～4メートル程度、最も深いところで6メートルという、仙台藩最大の沼であった。

品井沼の「品井」とは、アイヌ語で「大きな沢」を意味しており、「沼」とは「浅くて、泥土や水草の多い地で、外から水をまねいたため池」のことである。

この沼には、吉田川、鶴田川、大迫川等が流入しており、沼尻は小川で鳴瀬川に通じていた。沼の周囲の浅いところでは半ば干潟になっており、ヤナギやカヤなどが生い茂り、周辺は人々が小規模の開墾をしている程度であった。鴨・シギ・雁・白鳥などの生息地、飛来地であり、鯉・鯰・鰻などが多く、また沼の一面には菱(ヒシ)が生え、魚や菱取りでにぎわっていたという。

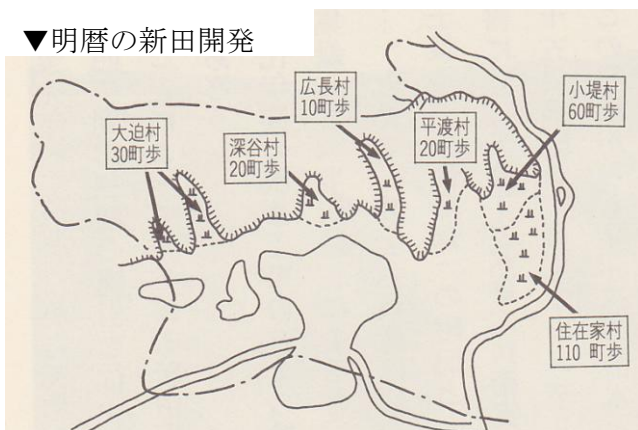
この広大な沼地を干拓しようとする企ては、古くから何度となく試みられたが、もともと標高が極めて低く、排水河川である鳴瀬川の水位に左右されて思うように排水されず、むしろ鳴瀬川の洪水の逆流によって氾濫を繰り返していた。

### ▼品井沼と周辺河川



## (明暦の新田開発)

仙台藩二代藩主の伊達忠宗(万治元年 1658 年に没)は、初代藩主である伊達政宗の政策を引き継ぎ、河川沿岸の谷地、内湖などの干拓を奨励した。藩士が自由に場所を見立てて新田開発を行うことを許し、その結果多大な新田が造成された。



(出典：鹿島台町史)

このころ、品井沼とその一円の土地は、松山の茂庭周防の知行地であった。松山初代の良元(茂庭家15代)の嫡子定元の時、明暦元年(1655年)知行地尻野谷地の新田開発を藩主に願い出た。この願い出は認められ、翌2年にかけて開発が進められた。この時の開発面積は、先の願い出によれば250町歩となっている。

## (元禄潜穴工事への流れ)

四代藩主伊達綱村の時代においても藩士出願の新田開発は盛んに行われた。開発された土地はその一部が開墾者の知行地として給付される仕組みであったことから、藩にとっても開墾者(藩士)にとっても有利な事業であった。貞享年間(1684～1687年)には、藩の表高62万石、その実高は100万石に達していたと言われている。

しかし、このころになると容易に開発できる場所はほとんど開発済みであり、残ったのは水害の多い難地だけとなった。これらの残存地は広大で、藩有地、藩士の知行地を含めた原野、谷地を対象に複数の郡や村の農民を動員して堤防や用排水路を敷設するといったことが求められることから、一藩士、一地方領主の力ではかなわず、藩営事業でなければ不可能であった。

品井沼一帯については、延宝元年(1673年)から貞享4年(1687年)までの14年間に、仙台藩我妻六兵衛を総監督として3回にわたる測量が行われ、干拓計画の基礎が作られていた。これは、品井沼の排水によって開かれる新田面積の大きさに着目してのことであった。こうして元禄潜穴着工へとつながっていったのである。